



南ぬ風

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌
ふえーぬかじ

52
— 2019.7~9 —
夏



那覇まちまーいの様子(首里城公園)

野球の読売巨人軍キャンプなどの参加型イベントが多いのも特長ですね。また、ラムサール条約に登録された漫湖湿地帯、海水浴が楽しめる波の上ビーチや水中観光船でのサンゴ観察、泊港から周辺離島へのアクセスも良いので、都市部でありながら自然体験やマリニレジャーもすっかり楽しめます。

那覇市の観光は順調に推移しているとはいえ、慢性的な交通渋滞や地域の環境美化など取り組むべき課題

WEBでの情報発信も重要ですが、一方で観光案内所という最前線で観光客の皆さんに接するからこそ、肌で感じることを見えてくる課題があるでしょうね。

観光は沖縄のリーディング産業です。関係団体が丸となって、こまめに連携し、盛り上げてい

空港や港のある那覇市は、沖縄観光の玄関口であると同時に、県庁所在地としてビジネスや物流の拠点として期待される役割も大きいですね。

那覇市観光協会として、観光の現状と今後の展望については、どのようにお考えですか？

交通アクセスの改善は那覇市内での周遊の促進になりますね。

また、琉球王国時代から伝わる宮廷料理や琉球漆器などの伝統工芸品、泡盛などの文化継承と認知度の向上については、那覇市観光協会でも必要性を実感しており、首里城公園見学の後にはライトアップされた首里城を見ながら、東道盆(とうだんぼん)に盛りつけられた琉球料理を楽しむという「まちまーいプレミアムガイド」を新設しました。

首里城と共に那覇の観光を盛り上げ、沖縄県全体の経済発展につなげたい。



一般社団法人 那覇市観光協会 会長 佐久本武

SAKUMOTO TAKESHI
文：いのうえちず



多様化、国際化の進む観光の現場でニーズを捉えたアプローチを
1954年(昭和29年)に前身である沖縄観光協会として設立された一般社団法人那覇市観光協会。会員数は424社で、事務局職員は45名、そのうち18名が外国語対応の職員という。国際通りで那覇市観光案内所を開設するほか、地元ガイドが案内する「那覇まちまーい」、外国人観光客受入整備事業、クルーズ船受入事業、福州園を含む松山公園文化交流施設や波の上ビーチを管理運営。観光の多様化、国際化にも柔軟に対応する組織のトップに、観光振興にかける思いを聞いた。



誌名「南ぬ風(ふえーぬかじ)」とは…南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことで。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。

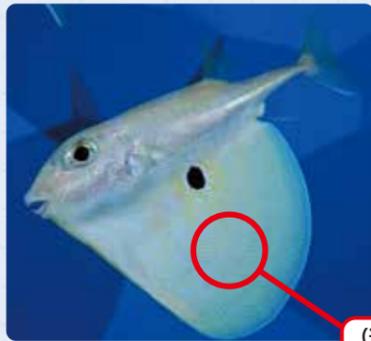
作品タイトル「ヒージャーの夢」
木目や木の質感を残した彫りが特徴的なこの作品からは、素材であるくすの木の香りがほんのり漂う。眠るヤギの安らかな表情は、角度によって少し変わって映る。「ヤギが夢をみているのか、それとも我々が夢と試みてみているのか」と考え、あえて立たせているところも、作品の個性をより際立たせる。
沖縄県立芸術大学 美術工芸学部 彫刻専攻
川田 勇介さん(滋賀県出身)
51号から54号までの1年間は、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第30回卒業・修了作品展」で受賞した3作品および推薦作品が表紙を飾ります。若い才能にご注目ください。

美ら島をつなぐ人	02
おきなわ暮らしのカレンダー	04
沖縄 美ら水族館で出会える生き物	05
沖縄の希少植物	05
調査研究	06
普及啓発	08
海洋文化コラム	09
うちなーの手わざ	09
運営管理	10
スポットライトの向こう側	12
財団いんふお	14
編集後記	15
おもろさうしの植物	裏表紙

contents



ウチワフグ



腹膜を広げる様子

沖縄美ら海水族館で 出会う生き物

Vol.12

和名:ウチワフグ 科名:ウチワフグ科
学名: *Triodon macropterus*

ウチワフグはインド洋から西太平洋の水深100~300mに生息する深海性のフグの仲間です。水圧の変化に弱く、生きた姿を観察できるのは、世界でも沖縄美ら海水族館のみです。一般的にフグの仲間は、危険が迫ると体を風船のように膨らませますが、ウチワフグは腹膜を“うちわ状”に広げます。このような特徴を持つフグは本種のみです。

沖縄美ら海水族館では、国立科学博物館の研究者と共同でウチワフグの腹膜の構造や開閉の仕組みを世界で初めて解明しました。また、行動観察を通して、他の生物を威嚇する際に腹膜を広げることが明らかにしました。腹膜の鱗には曲面を形成する微細な隆起があり、下方の隆起が上方の隆起の曲面の中に連続的に収まることにより、腹膜全体を閉じることがわかりました。腹膜を広げる様子は飼育員でもめったにみることはできませんが、泳ぐ姿を深海コーナーにて是非ご覧ください。(比嘉 俊輝)



①~④:腹膜に並ぶ鱗の拡大CT画像(②、④は断面画像)下の鱗が上の鱗に収まる構造がわかる。

沖縄の希少植物

Vol.29

和名:ホソバフジボグサ(細葉藤穂草)
科名:マメ科
学名: *Uraria picta*

レッドデータカテゴリー:
絶滅危惧 IA類(沖縄県)、絶滅危惧 IA類(環境省)

和名にある“フジボ(藤穂)”は、花穂が蔓性植物のフジ(藤)の姿に似ていることになみまします。陽当たりの良い原野に生育する多年草で、草丈が1mに達します。別名“トンボフジボグサ”のとおり、葉の付き方がトンボの様な姿をしています。7~9月に淡い青紫色の花を咲かせます。

日本国内では、沖縄県の宮古島、石垣島、西表島、小浜島で記録されていましたが、自生地の開発や植生遷移の進行による環境変化の影響で、絶滅寸前の危機に瀕しているのが現状です。最近の調査では、2011年に宮古島の1箇所1個体の生育が確認されているだけです。

沖縄美ら島財団総合研究センターでは、ホソバフジボグサの絶滅を回避するために、生息域外の保全施設で種子から増やし保存するとともに、生育特性を調べて栽培マニュアルを作成しています。

(阿部 篤志)



ホソバフジボグサ



ホソバフジボグサの花

おきなわ 暮らしの カレンダー

vol. 5



エイサーとは沖縄の伝統芸能の一つで、旧暦7月15日(地域によっては16日)の夜、祖霊を送るために、各集落の青年たちが音楽に合わせて太鼓を叩き、踊りながら集落内を練り歩く行事。旧暦の7月13~15日の三夜連続で踊る地域も多い。

地域によって、曲目や踊りの型は異なる。隊列は、先頭を舞う旗頭、大太鼓や締め太鼓、パーランクーという小型の片張り太鼓、太鼓を持たない手踊り、生演奏をする地方(地謡)、道化役のチョンダラー(サナジャー)で構成されることが多い。沖縄本島北部や南部の一部には、「継親念仏」などを歌う手踊りのみのエイサーもあり、これが古い形だと考えられている。

エイサーの起源については諸説ある。1603年(万暦29年)に琉球に渡来した袋中人(たいちゅうじん)が伝えた念仏踊りが起源であるとする説、古謡集『おもろさうし』にある「糸さおもろ」(集団舞踊を伴う)が由来とする説、18世紀の百姓の芸能「似せ念仏」が直接的起源とする説、「エイサー、



園田
沖繩市園田は、戦後主流となった華やかなエイサー。旧盆の道ジュネー(集落内の練り歩き)を追いかけるファンもいる。

うるま市平敷屋のエイサーは、僧侶の装束とされる墨染の着物にパーランクーがメイン。伝統的なエイサーの一つとされる。

エイサー、ヒヤルガエイサー」という囃子が由来とする説などだ。『勝連村誌』によると明治期のエイサーは、6~8人の青年グループが継親念仏などを斉唱しながら踊り、各戸を回って酒をもらうというムラの行事だったようだ。それが一変したのは、1956年(昭和31年)に当時のコザ市で開催された「エイサーコンクール」以降のこと。9団体のエイサーが競演するイベントに、約3万人が集まり大盛況だった。以後、沖縄本島各地でコンクールや大会が開かれるようになり、陸上競技場などの大舞台で見栄えするようになり、青年会は各地域の威信をかけて隊列や振り付け、衣装を工夫するようになった。従来、エイサーのなかった地域でも取り入れられるようになり、エイサーを練習する太鼓の音は沖縄の夏の風物詩としてすっかり定着し、最近ではポップスなどで踊る創作エイサーも盛んで、運動会や結婚披露宴の余興としても人気だ。

(文いのうちず)

自然史標本の収集と活用
〜沖縄の豊かな海を記録する〜



沖縄美ら島財団総合研究センター標本庫のようす

はじめに

沖縄県は大小160あまりの島々からなる島嶼県で、周囲を取り囲む熱帯の海[※]は、世界有数の豊かな生物多様性を誇ります。しかし近年、島を取り巻く自然環境は大きく変化しています。50年前の沖縄島はサンゴを踏みながらでないとリーフ外へ出られなかったと聞きますが、そのような発達したサンゴ礁は確実に減少しており、生物多様性への影響が危惧されています。絶えず変化していく自然環境を記録し、次の世代へ引き継いでいくために重要な役割を果たすのが自然史標本の存在です。

沖縄美ら島財団総合研究センターでは、これらの自然史標本を収集し、活用する取り組みを行っています。

自然史標本とは

自然史標本とは一般的に自然界に存在するあらゆるものを対象として、繰り返し観察できるように保存したものです。化石や鉱物などはそのままでも問題ありませんが、動物の場合は剥製にしたり、ホ

ルマリン液に漬けたりといった防腐加工が必要になります。当センターでは、6万点を超える水生動物の標本を所蔵しており、南西諸島の生物コレクションとしては世界有数の規模を誇ります。

最も充実しているのは魚類のコレクションで、元国立大学法人琉球大学理学部准教授の吉野哲夫氏が50年以上に亘り収集してきた沖縄の魚類が、2011年に当財団に寄贈され、今も良好な状態で保存されています。その中には沖縄島ではすでに一度は絶滅してしまったリュウキュウアユの標本も含まれており、沖縄島に本種が生息していたことを示す証拠のひとつとなっています。

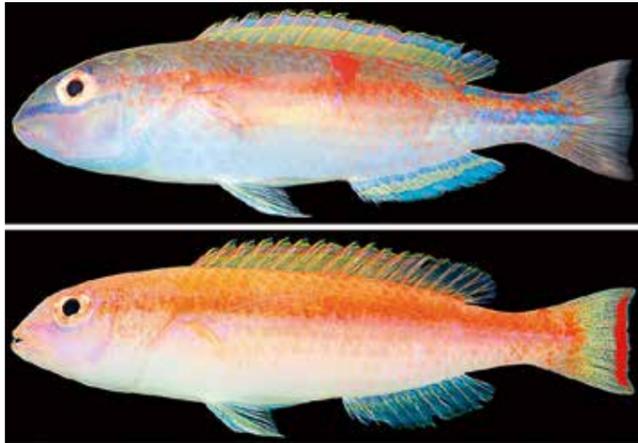
所蔵標本は今も増え続けており、沖縄美ら水族館で飼育員が採集した生物や、砂浜に座礁したクジラの死骸など、様々なルートから水生動物の標本を収集しています。標本作りは地味な作業ですが、沖縄の「今」の自然環境を記録する大切な作業です。

教育・普及活動での活用

また、当センターでは所蔵標本を教育・普及活動にも活用しています。水槽を泳ぎ回るサメは大迫力ですが、アクリル越しでないと観察することができません。標本であれば、実際に手で触れて歯の鋭さやサメ肌の質感などを感じることで、生体とはまた別の感動を伝えることが可能です。

平成29年度には沖縄県立博物館・美術館において「水族館でも出会えない！海のビックリ生物展」と題した企画展を実施しました。ここでは、今までに収集した珍しい水生動物の標本を一挙に展示し、1ヶ月の開催期間中に3万人近い方々にご来場をいただきました。沖縄美ら水族館では伝えきれない沖縄の海の魅力を、標本を通して伝えることができましたのではないかと思います。

今後も自然史標本の収集・管理を進め、沖縄の自然科学の発展とその普及啓発活動に寄与していきます。
(宮本圭)



日本初記録となったユウモドロベラ(上:オス、下:メス)



1971年、国頭村与那川で採集されたリュウキュウアユ

自然史標本の意義

このように収集された自然史標本はあらゆる自然科学分野の調査・研究に利用されますが、特に分類学的な研究において無くてはならないものです。なぜなら、生物の種類を調べる作業も、新種かどうかを調べる作業も、基本的には標本に基づいて行われるためです。

沖縄の海からは今でも新種や未記録種の発見が相次いでおり、当センターが発見したもののだけでも40種以上の生物が新しく記録されました。沖縄美ら水族館で飼育していた生物が実は新種だったということもあれば、釣り人から頂いた魚を海外の標本と比較した結果、日本未記録種と判明しユウモドロベラと命名したこともあります。

沖縄の生物多様性を正しく理解し、保全活用するためには、まず沖縄にどのような生物が生息しているかを知らなくてはならず、標本を活用したこれらの研究が沖縄の自然科学の土台を支えているといえます。



海のビックリ生物展で展示したザトウクジラの全身骨格



標本を用いた生き物教室の様子

沖縄の歴史・文化を学ぶ 郷土歴史文化学習事業



パネル等を用いてわかりやすく説明



首里城正殿前にて首里城の歴史等について説明

沖縄美ら島財団では、琉球王国の歴史や文化の普及啓発を目的に、沖縄県内の小・中学生を対象に首里城正殿等を学校行事の一環として活用していただける「郷土歴史文化学習事業」を実施しています。

各学校の参加人数や天候等によって活用の仕方は様々ですが、基本の流れとしては、首里城正殿前にて首里城に関する歴史や建物の特徴、見どころ等を説明し、質疑応答を受けた後、自由に見学してもらった学習内容となっています。希望に応じて、解説員による首里城や琉球王国の歴史文化に関する概要説明も行っています。また、学校に向いて講座を行い、事前学習や事後学習として活用できるプログラムもあります。平成30年度には、小・中学校合わせて95校、5千人余りの児童・生徒に活用していただきました。見学後には学習成果として、児童・生徒が作文や図画、

新聞等に学んだことや感じたことをまとめて提出していただき、2019年3月～4月には、首里城公園首里杜館ビジターロビーにて「学習結果報告展」としてご紹介させていただきます。

児童・生徒たちの感想からは実際の正殿を目にして、想像していたよりも大きいことや赤いこと、龍がたくさんいることに驚いた感想や、建物の天井が低いことで、昔の王様やお役人さんたちはあまり背が高くなかったのではないかと推測する等、子どもたちの感性がダイレクトに伝わってきます。さらに首里城を沖縄の自分たちの宝としてもっと知りたい、守っていききたいという感想も見られます。今後も、本事業が児童・生徒の郷土の歴史文化への関心を高める機会になることを願い取り組んでいきます。

(比嘉明子)



学習結果報告展(首里杜館ビジターロビー)



講座のようす

首里城公園
「郷土歴史文化学習事業」

お問い合わせ 首里城公園管理部 首里城事業課 調査展示係
TEL.098-886-2020

海洋文化コラム Vol.6

～「サンゴのかけらで“おまじない”」～

みなさんは飲食店の入口に塩を持った小皿が置かれているのを見たことがありますか。これはお客さまがたぐさく来るようにという「おまじない」です。また、お葬式に参列した帰りに、玄関先で体に塩を振りかけることもあります。これも体に付いたけがれや、連れてきてしまった悪い霊を祓う「おまじない」です。塩に神秘的な力があると考え、幸運を招き、不運を祓うために、塩を「おまじない」にするのです。沖縄では土地や建物を守るように、塀や門口に塩を置くことも行われています。

また沖縄には、他の地域では見られない独特の「おまじない」もあります。浜に打ち上げられたサンゴのかけらを使う



塀の上の塩(2013年2月に宮古島・平良市街で撮影)



門前にまかれたサンゴ(2018年11月に西表島・祖納集落で撮影)

のです。

西表島の祖納(そない)という集落では、シチ(節)というお祭りの前夜に、本土の節分の豆のようにサンゴのかけらを家の内外にまきます。また、沖縄県内各地では、赤ちゃんを産んだばかりのお母さんや子どもの食卓に、生命力の回復や健やかな成長を願ってサンゴのかけらを入れたお吸物を出すことがあります。

海水や日差しに洗われて真っ白になったサンゴのかけらは、見るからに清らかです。その清らかさに昔の人々は神秘的な力を感じたのでしょう。正確な由来は不明ですが、豊かなサンゴ礁がある沖縄らしい「おまじない」ではないでしょうか。(板井英伸)

琉球王国時代の「手もぎ」

琉球王国時代から現代へ受け継がれてきた「手もぎ」が、つくり出す伝統工芸の魅力にせまります。

vol. 4

三線の美

音色と同様に職人がこだわりをもって製作するところでもあります。その美意識は、首里城に見られる城壁の曲線美にも通じるものがあるのかもしれない。

沖縄美ら島財団では、18世紀後半の江戸上りの際に尾張徳川家へ献上された琉球楽器類を徳川美術館協力のもと、材料・技法の調査研究を行い、首里城公園で展示できるよう模造復元しました。調査の結果、三線の胴には、鼈甲や鯨の髭、象牙などを材料とした豪華な装飾が確認できました。このような三線は類例が少なく、往時も献上用などの特別な三線に施されたものではないかと考えられます。

(宇保朝輝)



復元した三線。原資料は、徳川美術館に往時の状態で現存。

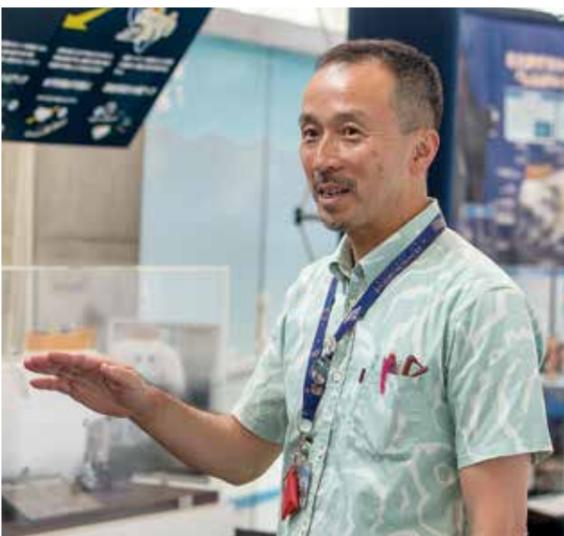
復元した三線は、

THE KUMIODORI 300 -組踊展-

期間:2019年7月5日～11月14日
場所:首里城公園

にて展示します。この機会にぜひご覧ください。

国立研究開発法人海洋研究開発機構(以下、JAMSTEC)は、海洋・地球環境分野の調査や研究開発を実施し、科学技術の進展に貢献する海洋科学技術の研究機関。国際海洋環境情報センター(以下、GODAC)はJAMSTECの情報発信拠点として、2001年に沖縄県名護市にオープンした。青少年の人材育成を目的に、海洋科学技術の理解促進や普及広報活動に取り組んでいる。地域貢献や各種イベントで沖縄美ら島財団(以下、財団)とのコラボレーションも多くGODACで話を聞いた。



国立研究開発法人 海洋研究開発機構
付加価値情報創生部門
国際海洋環境情報センター(GODAC)
管理課 課長
松井 宏泰 まつい ひろやす

—JAMSTECの情報発信拠点として、GODACでは、具体的にはどんなことをされていますか？

松井 「一つ目は、JAMSTECの調査データをアーカイブして、公開できる形にする作業を行っており、NUUNUKUI(沖縄の島言葉で何もかもという意味)というデータサイトで、データ・画像・映像などを公

開しています。例えば、JAMSTECの『しんかい6500』という潜水調査船は、水深6500メートルの深海に到着するまでには、母船を出てから2時間半ほどかかり、海底に到着してからさらに3時間ほど調査活動を行います。その調査活動中には、さまざまな生き物の姿や海底の地形が映像で記録され

ます。生き物が写っていた場合、その画像や映像を検索できる状態にするには、その生き物が何なのか種類別に分けて、データに情報をつけるアノテーションという作業が必要になります。そういった作業の蓄積を「EDI(深海映像・画像アーカイブス)やBISMAL(海洋生物多様性情報の発信サイト)」で検索できるようにしているわけです」

—大変な作業量ですね。
松井 「センターのスタッフがコツコツ進めています。二つ目は、生物情報を集約する国際的データベースOBSへの情報提供ですね。三つ目は、JAMSTECの研究活動の記録や文書の情報を、ネット上で検索・閲覧できる「JAMSTEC文書カタログというサイトの管理です」

—一般向けの普及広報活動では、どんなことをされていますか？

松井 「GODACには一般向けの見学コースがあつて、海洋科学技術に関する情報を展示しています。潜水調査船や探査機の模型、深海生物の標本や深海映像、沖縄の海に関する展示などで最新の研究成果を紹介すると共に、水圧実験などの実演も行って海洋科学技術の面白さを伝えるようにしています。団体向

けプログラムもあるんですよ」

—GODACへ見学に来るのは、どんな方が多いですか？
松井 「地元ファミリー層、観光客、県内の小中学校、県外、国外からの教育旅行、企業、団体…さまざまな方がいらつしやいます。沖縄美ら海水族館帰りの方も多いですよ。入場者数は及びませんが(笑)、沖縄美ら海水族館で沖縄の海に興味を持った方がGODACで深海や環境問題を学ぶという例も多いように思います。

—沖繩の深海にはどういった特徴がありますか？
松井 「琉球海溝には、『しんかい6500』がよく試験的に潜航しています。また、沖縄トラフには、熱水鉱床という、海底から熱水が噴き出しレアメタルなどの鉱床が形成されるポイントがあつて、過去約5年間、調査を行いました。JAMSTECでは、生き物だけでなく、海底の地形や地質、海底資源などの調査も行い

ます。そういう意味では、沖縄県との協力体制も重要だと思っています」

—沖縄の海といえば、サンゴ礁の浅い海というイメージが強いですが、それだけではないんですね。サンゴの減少も問題視されていますが、環境学習の観点から、どのように伝えていきますか？

松井 「サンゴの減少は沖縄だけでなく世界的な問題です。二酸化炭素の排出増加による海洋酸性化のメカニズムはこの海にも共通する問題ですし、地球温暖化による気候変動での海水温上昇に伴うサンゴの白化現象も無視できません。こういった社会課題を知ることで、海洋科学技術を深く学ぶきっかけにしてもらえたらいいですね」

—おでかけ教室も行うそうですね。
松井 「沖縄県内の小中学校や高校、大学などに、深海やサンゴ礁、環境学習に関するおでかけ教室を行います。職場体験学習やインターシップも受け入れていますよ。キャリア教育としては、海に関わる仕事について漁業やマリネリジャー以外にもこんな仕事があるよという話をします。調査船を運航するには、航海士や機関士、船舶調理師も必要。地上では、データの整理をするスタッフも、データ

ベースの管理運営をするエンジニアも必要です。GODACには科学を分かりやすく伝えるインタープリターや絵などの制作ができるスタッフもいます。一口に研究機関といっても、これだけ多職種の人たちが関わっているという話を聞くと、児童・生徒たちの仕事に対するイメージも広がるようです」

—海洋科学技術を一般の人たちに身近に感じてもらうために、心がけていることはありますか？

松井 「GODACにも、沖縄の海に関する展示があります。説明する時は、沖縄の生活に密着した内容を加えるようにしています。たとえばサンゴの石灰質は沖縄の建造物の漆喰や石積みなどに使われています。一方、サンゴの減少の原因の一つ、海洋酸性化が進むとサンゴ礁が形成しにくくなります。この二つを関連付けて説明することで、海洋酸性化が生活に影響を与えることを理解してもらえます。さらに海洋酸性化は地球温暖化とも連動しているので、私たちがCO₂排出の削減のために何ができるかを考えてもらっています。こういった身近なことをきっかけに、特に次世代を担う子どもたちには、海のことに興味関心を持ち、自分たちに何ができるかを考えてほしい。



『沖縄美ら海水族館×GODAC 深海展』のイベント、「深海のお話と水圧実験」

見学やおでかけ教室、イベントは重要だと考えます。深海の生き物が大好きな小学生が、専門家も驚くような質問をしてきます。頼もしいですよ」

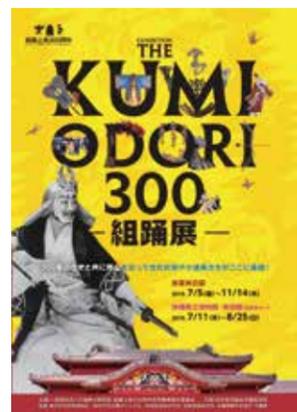
—財団とのコラボレーションも、実は多いですよね？

松井 「地域貢献や人材育成を目的として、沖縄本島北部の行政・教育・研究機関が連携する「ALLやんばるまなびのまちプロジェクト」という取り組みを行っています。財団、沖縄科学技術大学院大学、沖縄工業高等専門学校、GODACなどが参画しています。定期的に会議を開いて情報交換や意見交換を続ける中で、ヨコの連携関係が築けており、協働でイベントに参加したり、出前授業などを実施しています。また平成29年度は沖縄美ら海水族館の開館15周年を記念して沖縄の深海にフォーカスした標本・パネル展『沖縄美ら海水族館×GODAC 深海展』を実施しました。小型水中カメラロボット操縦体験や水圧実験を水族館で行ったり、グッズを共同

で製作しました。また、沖縄県立博物館・美術館での『水族館でも出会えない！海のビックリ生物展』では、標本や沖縄近海の深海映像を貸し出したり、実験などの出前授業をしました。『丸の内キッズジャンボリー』(東京都)など県外のイベントでは、お互いに沖縄の海に関する展示をすることが多いのですが、同じベースの中でも、ここからこっちは財団、こっちはGODACと線引きすることなく、うまくコラボして展示することも増えています。また、GODACでは毎年11月23日に普段は非公開の施設まで見学できる『施設一般公開』というイベントを開催しています。2018年には財団からスタッフを派遣してもらって、深海サメの解剖実験をしたり、水族館では普段しないようなマニアックな話をしてもらったりしました。ちなみに普段、GODACで展示しているオオグソクムシの個体は、財団に提供してもらったものなんです。今後はイベントに加えて、GODACのデータベースで財団の調査研究データを発信するといった研究の面でも積極的に連携していきたいですね」

—ありがとうございます。
(文いいのうえちず)

組踊上演300周年を記念し 関連事業を実施します



THE KUMIODORI 300 -組踊展-

首里城公園 期間：2019年7月5日～11月14日
場所：南殿特別展示室・黄金御殿特別展示室

沖縄県立博物館・美術館（おきみゆー）
期間：2019年7月11日～8月25日
場所：博物館企画展示室・特別展示室1・2

する展示を行います。体験型イベントなどもご準備しておりますので、ぜひお越しください。

また、この記念すべき節目を盛り上げ、組踊の認知度向上や普及発展に寄与するため、他では手に入らないオリジナル企画商品として①「カキワリ団扇」②「ふるしき組踊」③「組踊かるた」の3商品の開発を進めています。これらの新商品は、日常の中で雑貨として活用いただけますので、組踊をより身近に感じていただき、楽しみながらお子さまからご年配の方々までその面白さに触れ、奥深さに関心を持って頂けることと思います。2019年7月から段階的に発売予定です。



県内初の味覚！たっぷり、あふれる上品な甘い口どけ。 オリジナル商品 『美ら島ゴールドパイナップル プレミアムソフト』新発売！

沖縄美ら島財団は、沖縄県の新しい特産品の認知度向上を図り、地域の産業振興に寄与することを目的として、関連会社の農業生産法人 株式会社 沖縄美ら島ファームが沖縄本島北部やんばる地域で生産するパイナップル「ゴールドバレル」を原材料に、沖縄明治乳業株式会社と共同開発した新商品「美ら島ゴールドパイナップルプレミアムソフト」を2019年6月1日に発売しました。



商品は、沖縄県産パイナップル素晴らしさを、より多くの方に味わって頂けることと思えます。

ゴールドバレルは、沖縄県が開発した品種で、当財団総合研究センターの増殖技術を活用して育て、大玉かつ今までにない芳醇な香りや、溢れるような甘さが特徴です。この果汁を10%配合した本



園熱帯ドリームセンター内無料休憩所「うりずん」にて合同記者発表を行いました。試食会では、メディア各社をはじめ渡久地保育所（本部町）の園児たちも試食し「香りのするパイナップルは初めて」、「甘くて美味しい！」など好評でした。

商品名／美ら島ゴールドパイナップル プレミアムソフト
価格／420円（消費税込）

販売場所
■海洋博公園内
オキちゃんパーラー、ピーチスナック、トロピカルフルーツカフェ「スコール」
■首里城公園内
カフェ「龍橋（りゅうひ）」

【リュウキュウアユ保全活動】 源河川で魚道掃除を実施しました

2019年3月5日、沖縄美ら海水族館で育成されたリュウキュウアユの稚魚1000匹を地域の方々で協力し、名護市源河川に放流しました。リュウキュウアユは沖縄島にかつて生息していましたが、1980年頃に絶滅してしまいました。沖縄美ら海水族館では、奄美大島由来のリュウキュウアユを人工繁殖させ、これまでに多くの稚魚を放流しています。



どで閉塞してしまうと、その機能が發揮されなくなります。そこで、沖縄美ら島財団の職員有志によって魚道閉塞の原因となる流木や土砂を取り除く作業を行いました。掃除前は閉塞して魚道から水があふれていましたが、詰まりが解消すると、流路内に水が流れるようになり、魚が行き来しやすい状態となりました。このように、野生生物の保全は放流等の活動だけでなく、生物の目線に立ったきめ細かなケアも非常に重要なのです。



当財団では、このような環境保全活動についてこれからも積極的に取り組んでいきます。

沖縄国際洋蘭博覧会2019 内閣総理大臣賞受賞株寄贈 玉城政隆氏に感謝状を贈呈



沖縄国際洋蘭博覧会2019 総合審査の部 内閣総理大臣賞受賞株

2019年2月2日～11日に開催された「沖縄国際洋蘭博覧会2019」において、総合審査の部で内閣総理大臣賞を受賞された玉城政隆氏が、受賞株を沖縄美ら島財団へ寄贈して下さいました。感謝の意を表し、5月16日に玉城氏へ沖縄美ら島財団理事長花城良廣より感謝状を贈呈いたしました。玉城氏からは「20年間かけて大株に育てたランです。日光が万遍なく当たるように、灌水のたびに少しずつ鉢を回して栽培しました。もっと大きく育ててもらい多くの方々に見て頂きたい」との言葉を頂きました。

新役員紹介



- 理事長 花城 良廣（はなしろ よしひろ）
- 常務理事 後藤 和夫（ごとう かずお）
古堅 孝（ふるけん たかし）
- 理事 襲田 正徳（おそだ まさのり）
小林 昭（こばやし あきら）
福田 豊（ふくだ ゆたか）
謝花喜一郎（じやはな きいちろう）
平良 武康（たいら たけやす）
福治 嗣夫（ふくじ つくお）
仲尾次洋子（なかおじ ようこ）
- 監事 川上 康（かわかみ やすし）
西里 喜明（にしざと よしあき）

6月に発売になった美ら島ゴールドパイナップルプレミアムソフト、ゴールドバレルの香りがさわやかに香り、優しい甘さが夏にぴったりのソフトクリームです。ぜひ海洋博公園、首里城公園でご賞味ください！
(SK)

おもろさうしの

植物

其の十七

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることが出来ます。

「くわげ・なです」

(シマグワ)

(前略)

又 辺り山 あた やま

垣内山 かくなち やま

又 くわげ 植ゑて

なです 植ゑて

又 鼓造て

鳴り呼ぶ 造て

【第一七卷二〇二】

(前略)

辺り山

垣内山に

桑の木を植えて

ナデス(桑)を植えて

桑の木で鼓を造って

鳴り呼ぶ(鼓)を造って

(神をお迎えし、お祝いをしよう)

「解説」

辺り山、垣内山に、桑の木、なです木を植えて、桑の木で鼓を造って、鳴り呼ぶ(鼓)を造って、神をお迎えし、お祝いしよう。

「くわ」は植物名。桑。葉は蚕の飼料にする。木は鼓を造る材料にする。

「なです」は桑の実。黒色に熟しあまい。方言ではナンデーシーという。

桑の木を植え、その木で鼓を造って、神をお迎えし、お祝いをしようと謡っているオモロ。



一口メモ

シマグワは九州南部以南、台湾、東南アジアに分布し、高さ5〜6メートル程度の落葉性の中木で、雌雄異株(しゆういしゆ)である。
山野に自生し葉は食用(芽、資料、緑肥)に利用される。果実は生食されるほか、ジャム、リキュールなどの原料にもなる。
材は装飾材または高級用材として重宝されるほか、キクラゲの櫛木に用いられる。樹皮は製紙原料に、葉や根などは利尿、鎮痛剤として薬用にも利用される。

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら海水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館(おきみゆー)



2019年7月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

企画・編集・発行

一般財団法人

沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888

TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷

〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5



この印刷物の情報は個人情報保護マネジメントシステム(プライバシーマーク)を適用しています。
株式会社 東洋企画印刷 プライバシーマーク (24000430)

季刊誌 南ぬ風 夏号 vol.52 2019.7~9

ISSN 2189-4140